

アフリカ飼料草採集紀行 (3)

農林省草地試験場
育種第1研究室長 宝示戸 貞雄

ケニヤ(その2)

12月30日から正月2日までは、種子整理と市内の採集、政府出版所での資料購入などで過ごす。3日、農業省に研究管理官のワカパラ氏を訪れ4日以降の日程を確定。各所への連絡をお願いする。

4日、西郊30km、ムグガにあるEAAFRO本部を訪問。思ったとおりバス停から5km。歩く時間はその分早目に出てから問題ないが、路傍の見事なスターグラスは残念ながら若過ぎた。本部には飼料作物部門はないので話はあまりはずまない。図書館を見せてもらい、最近の年報をもらって昼頃には辞去した。

5日、市内にある東アフリカ植物標本館訪問。館長カブイエ博士は中年の女性。イネ科分類の権威で持参の種子の同定をお願いする。何分にも穂をむしったサンプルなので確認できぬものもあったが、名刀乱麻のありさま。かたわらでただ見ているのも恥かしく、途中から揩葉標本と文献に頼って1日取り組んでみたが、経験2か月ではさっぱり進まなかった。

キターレへ

6日朝8時10分、ナイロビのバスター・ミナル発、ウガンダへの往復でなじみの道を北西へ400km、キターレへか向う。このルートは前年雪印種苗の中野氏が同じくバスで旅した道である。午後、先日夜の寒さにふるえた赤道付近、ほぼ最高地点で都合よくバス故障、10分間。目ぼしい収穫はフェスツカ・アビシニカ。このあたり、少なくとも1日をかけて採集したい所である。夕方6時キターレ着。人口8万、ケニヤでは第8番目の都会で立派なホテルもある。

7・8の両日は郊外にある国立農業試験場を訪問した。ケニヤの農試の本場ともいえる所で、草地研究は1930年代から開始し、セタリヤ、ローズグラス、ギニヤグラスなどでは育成品種もある。導入・育種のほか、牧草の採種や草地造成管理の研究部門もあり、今回歴訪した5か国の中では最も強力に牧草研究が進められているとみられた。収集した1,000余点の牧野草が保存栽培さ

れており、2日目にはその一部の採種と写真撮影を行なったが、これをすっかり分譲願えれば素晴らしいものである。

1日目の午後はケニヤ種子会社を訪問、近代的な精選工場をもち、品種別に色分けした袋に詰められたトウモロコシ1代雑種種子の袋の山は、先進国で見るのと異ならない。とかく精選不良のローズグラスも穀実粒35~60%までかなりうまく精選していた。郊外にある1,600haの農場はローズグラスの収穫中。豊富な労働力によって採種は人海戦術の手刈り。トウモロコシの脱粒も農夫のおかみさんや娘さんの手作業である。ローズグラス採種後の畠は、これは機械力によって乾草梱包が作られていた。

2日目午後は同種子会社の社長ヘルバート氏らのご案内で北方へ採集旅行。左手にウガンダ国境に聳えるエルゴン山を望みながら、土の道を100km以上でとばす。1,900mのキターレから2,100mのマクタノ部落を過ぎれば道は下りにかかり、やがて眼下にスマム川の盆地が展開する。直線でわずか50kmながら、この低地(多分1,400~1,500m)はよほど雨量が少ないとみえ、サボテンと大半落葉したかん木のほか植生はまことに貧しい。雨季には水の溜ることもあるのかヒエの類の群生する所もあったが、いずれも脱粒後。わずかにスマム川の岸辺でギニアグラスとソルガム若干が得られた。畠はほとんどない。乏しい草で生きる多数の牛と山羊が、この住民の生活の糧である。老人の身につけるのは布1枚だけ、しかし、こんな避地ではうっかりカメラは向けられない。

翌9日、同社会長ヘイルパス氏の車に便乗ナイロビへ。70代半ばとお見受けしたが運転は見事なもの、午後3時には到着した。

10日、郊外の国立農業研究所で種子の植防検査。親切で極めて迅速であるが、それは日本へ持ち帰ってからよほど慎重に取り扱いを要することを意味する。午後、市内で資料を追加購入して発送した。

キボコからツァボへ

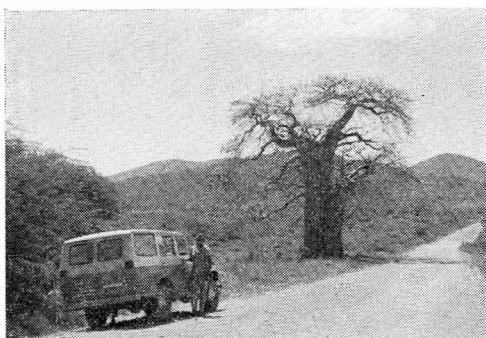
11日朝8時ナイロビ発、再び日本大使館の車で一路東南へ。ケニヤ第一の海港モンバサに達する幹線道路で、草



原の中を素晴らしい舗装道路が伸びている。ブッシュが少なく雨季直後で緑の大草原は実に美しい。途中採集しながら11時キボコの牧野試験地着。場長ローガット博士のご案内を受ける。当地は標高1,000m、年雨量550mmの半乾燥地で、自然草地を対象にブッシュの刈り払い、火入れ、追播、放牧管理などによる草生改善をねらった試験地である。場内にカモシカを見かけ、象の糞も珍しくない。試験家畜は夜間は厳重な囲いの中に収容され守られている。研究面では試験地開設後間もなくで、成果はこれからというところ。

自然草原の牧養力は牛1頭に6～8haのことだが、なるほど、この辺の草地はブッシュだらけ。季節的な補充飼料または乾季用草地で過放牧を防ぎ、ブッシュ退治ができれば改善の余地はかなり大きいだろう。15時辞去。

ムチトの町から右折してツアボ国立公園に入ると、見違えるほどブッシュが減り、ボスリオクロア、クロリスなど高地とはまた違った草原が展開する。おとぎの国を思わせる太い幹の巨木バオバブも目だつようになる。国道沿いでもライオンを見かけたし、草丈1mほどのこんな草原での採集はやや緊張せざるを得ない。夕刻、キラブニ・ロッジ着。この日の走行330km。石造草葺きのシャレた観光ホテルで、ロッジ前の草原には水場が作られてあって、翌朝は象、カモシカ類をはじめ多くの動物の姿を堪能できた。



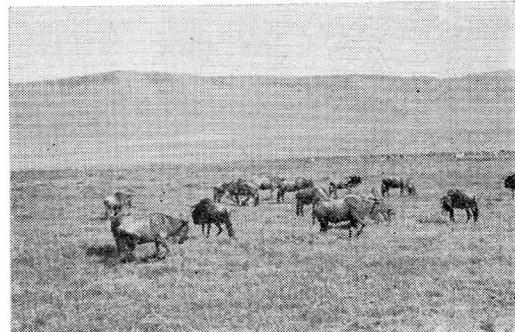
バオバブの巨木コングワ付近（タンザニア）

12日、国立公園を西へ抜けて遊牧民の土地マサイランドを走る。路傍に見かけるマサイ族は、男女とも赤い布をまとい、ビーズの首飾り、腕輪に足輪、耳飾りと大変なオシャレである。キリマンジャロへ向う観光道路でもあるので、写真モデルになるのが大事な収入源。1回5シリング(220円)で高過ぎると運転手のダニエル氏が固くとめるのも道理、高校卒の月給が150シリング、しかも就職のチャンスは極めて少ない国柄である。それで写真は撮らなかったものの、あの長槍をもった草原の戦士の姿は、今になれば惜しいことをしたと思う。

このマサイランドはどこも過放牧。それに時期も早過ぎて、雄大な眺めの割には収穫は乏しかった。夕刻早くナイロビ帰着。

タンザニア

1月13日朝、12月以来ナイロビでの根拠地に使ったアインスワースホテルに別れを告げる。リュックの上にボストンバッグを重ね、カメラ、水筒、キャラバンシユーズとかなり重装備だが、東アフリカは世界の観光地。日本人も含めて多くの若者が似たような姿で旅行しており、とくに珍しくはない。タンザニアの首都ダルエスサラームに向かうバスにも、数名の白人が乗り合わせていた。バスター・ミナルにはタンザニア紙幣をケニヤ紙幣と交換を求める連中がつぎつぎと来る。もちろん違法行為だが、公定レートは同じでもケニヤシリングの方がかなり



タゴロゴロクレーターのワイルドビースト（タンザニア）

強いらしく、これはその後の旅行中にも相応の物価高として感じられた。

南へ、ナイロビを離れれば間もなくマサイランドで、槍を片手にマサイ族がつぎつぎと乗り込んでくる。槍は入口の車掌が取り上げて床にガラリ、座席は後部へ。これがお決りである。11時半、国境のナマンガ着。槍、楯、首飾りなど珍しい土産売りが多い。昼食と出入国手続きを済ませ、同じバスでタンザニア北部の都会アルーシャに向った。

タンザニアは74万km²、人口1,300万、肉牛1,000万、山羊、羊700万頭と数字の上では大畜産国であるが、この国も乳製品はもちろん肉の輸入もあり、大半の家畜は流通経済に結びついてない。この点ケニヤは気候のよいのと大農経営があって乳肉製品の輸出国であるとの対照的である。

アルーシャとヌゴロゴロ動物保護区

国境を過ぎると4,561mの美しい独立峯メルー山の姿が次第に近づく。このメルー山から東のキリマンジャロ(5,896m)にかけての高原地帯は比較的涼しく、高地ほど雨量にも恵まれるので、タンザニアでは重要な農畜産地帯といわれているが、バスから見る限りでは大農場も少なく、ケニヤの高原ほどよく利用されているとは見えなかつた。15時前、メルー山南麓のアルーシャ着。ナイロビから280km。お役所は16時に閉まるので、この日は関係者に連絡とれず。

翌朝、地方農政事務所を訪れ、隣町にあるテングル農業試験場までジープを出してもらえた。日本青年海外技術協力隊員が100名余りタンザニアに派遣されており、同隊員深沢良明、岡部立夫両氏にも会えて、いろいろこの辺の農業事情をお聞かせいただく。同試験場は現在研究活動が中断されていたが、牧草の見本園は残されており若干の採種もできた。同地方にもギニヤグラスやソルガムなど優良草もあるにはあるが、時期尚早、よい収穫はまったく期待できない。それならばと思い立って、翌15日には有名なヌゴロゴロクレーターへとサファリの車をとばすことにした。

車は日本のカローラ。運転手つき。朝5時発夕刻5時帰着の往復400km。割引きで500シリングであった。目的地では2,300mの外輪山上からランドクルーザーに乗替えて、阿蘇山のそれより小さい直径17.8kmのクレーター内(高1,700m)に下る。内部はまさに動物天国で、1万頭のシマウマやカモシカ類に、ライオンが1グループ7~8頭、象が10数頭、若干のサイなど。それで丁度バランスがとれている。緑の草原に豊富な動物はまことにどのかな光景であるが、残念ながら人は車から降りられない。収穫はアルーシャへの帰り道だけとなった。

タンガへ

1月16日、朝のバスで次の目的地、インド洋岸のタンガに向かう(400km)。途中、キリマンジャロの秀麗な姿が次第に近づく。モシはその登山根拠地としても知られた町である。高地の草もさることながら、日頃鍛えた万年青年の体力試しには絶好の機会。しかし残念ながら、登山に要する4泊5日の日数はどうしても捻出できない。それに万年雪の上は明らかに調査目的の枠外である。……キリマンジャロはついに草原の彼方に姿を没した。

午後1時、ゴンチャ部落でバス故障。良草多し。修理了って出発したのは5時半。その間ずっと門口に坐り込んで見物する住民。何もあわてふためいて働くなくとも暮して行けるのである。こちらもそのペースに慣れた。その日のうちに到着を見込んだタンガには、途中コログエでやむなく1泊したため、17日昼頃到着。キリモ(農業の意味→農業関係役所)地方事務所には、首都の農業者から宝示戸が本日午後1時到着する旨の連絡が届いており、それに危く間にあい冷汗の思いであった。

タンガには2泊。畜産試験場とムリンガーノ農業試験場を訪問。タンガは海岸の高温乾燥地帯で、両者とも草の研究には見るべきものなく、後者ではサイザルや油椰子が目だった。多くの畑作物はまだ播種前であった。特記すべき草はジギタリア、モンバサーナ。日本のメヒシバ属だが良質の永年草で海岸砂地に良い放牧草地を作っていた。その他の良草もいずれも若過ぎ、タンザニアで

は専ら見て歩くばかりである。

タンガから首都ダルエスサラームまでは、青年技術協力隊員古屋克子嬢の車に同乗の光栄を得た。2車線のあまり上等でないアスファルト道路を、1,000 cc の車で彼女は 130 km、私はどう頑張っても 120 km どまり。昼に出て途中 2・3 採集をしながら 570 km、夕刻にはダレスサラーム着。自動車はこういう所で乗る物と思い知った。

モロゴロからムワンザへ

農業省では、日本大使館と海外技術協力団野田兼良氏との協議によって、宝示戸の国内日程はほぼ完全に計画され、それぞれの出先への連絡もなされていた。21 日ダレスサラーム発西方へ向う。モロゴロまではバスで半日。ダレスサラーム大学農業学部訪問。24・25 日はムプワブ家畜育種場。26 日、コングワの牧野試験地と国立牧場。その夕刻ドドマ着までは試験場の車で送っていただいた。27 日ドドマ発、汽車で 1 昼夜、ビクトリア湖南岸のムワンザへ、夜半車窓から美しく輝く南十字の五つ星を迎ぎ見た。

ダレス、ムワンザ間約 1,300 km。この間ずっと炎暑の地、頭上から照りつける日射は相当のものであった。ムワンザはこれらの中で唯一の特種適期の土地。27 日は湖畔で採集。28 日に郊外 30 km のウキルグル農業試験場を訪問。この国で 5 指に満たない牧草研究者の 1 人ダウェ氏は、1972 年中には英國に帰るとのことであや元気なく見えた。

29 日空路ダルエスサラーム帰着。この地もやっと適期に達し、市内のゴルフ場周辺でかなり採集ができた。印度洋で 5 分間ほど泳いでもみた。

2 月 2 日同地発。4 日夜、氷雨の羽田に無事帰着した。

おわりに

3か月間、5か国をややガムシャラに走り回って集めた種子は約 1,000 点。既述のとおり未熟種子も多いので、そのうち発芽するのは 6 割もあるろうか。一部の種子は船

便で送る誤りをしたために到着に 10 か月を要したり、脊負って帰った種子も調製に手間どって、試作を開始したものはまだホンの一部分に過ぎない。こうするうちに第 2 回探索導入旅行を命じられて、その出発日が目前に迫っている。第 2 回は自動車も使えるし、かなり効率的な収集が期待できるが、さて、得られる種子のうち果たしてどれだけが日本の役に立つだろうか。本土では大部分が越冬不能で、牧草としての利点は大幅に制約される。沖縄まで含めても、日本の飼料草として直接、または育種素材として間接に役立つものは決して多くないだろう。

しかし、熱帯の強烈な太陽エネルギーの下に放置された広大な未利用地と、人口爆弾を抱えた宇宙船地球号の遠くない将来を考える時、これらの土地の誤りなき開発利用の重要性を感じざるを得ない。もちろん、開発はそれぞの国が主体的に行なうべきであろうが、人材不足もまた事実である。熱帯、亜熱帯諸国民の生活向上のための農畜産開発。そこに焦点をあわせた草地飼料作物研究も、大国日本が取り組んでしかるべきであろう。集める種子がそんな面でも何がしかの端緒に役立ったらと思う。

馬鹿正直な逐一報告で大幅に予定枚数を超過しました。編集者と読者諸氏にお詫び申し上げます。

(1967 年 11 月)

(筆者は農林省草地試験場
(牧草部育種第 1 研究室長)

